

んと言っているではないか。直ちに中隊長を呼べ。」
中隊長秋山中尉がキツくお灸をすえられたことは、想像に難くない。

モルさんが殴られたその二、三日後、部隊長は軍人としての敗戦観からか、壮烈割腹自殺された。また、中隊長は将校集団となる事で中隊から離れて行った。問題の滝沢見習士官も我々の周りからいつしか姿を見せなくなった（あるいは中隊長と共に将校団に加わったか？ それは覚えがない）。終戦の悲劇は束となって我々の身边に降りかかって来たのである。

幾度も編成替えてモルさんがどうなったか、再び会うことはなかった。まさか兵隊達がその後ソ連に連れて行かれるとは誰も思わなかったし、シベリアに行っても同じ運命を辿ったと思われるモルさんが、この厳冬を生き抜いて行けるだろうか？と、私は思っていた。

その後、抑留の地でたまたま渡された飯盒の胴体にふと「森」の名前を発見した時、咄嗟に「これはモルさんの飯盒だ！」と思った。モルさんは心配していた

通り死んだか？ あるいはこれは他の森さんかも知れない。でも私はモルさんの物だと信じていたい。

我が同年兵モルさんが遠い異国の凍土の下深く眠ってしまっていたことは、その後復員してから何年か過ぎて見つけた抑留死亡者名簿で紛れもなくわかった事実であった。

痛恨

神奈川県 田口幸安

予期せぬ不運のシベリア連行、いつ帰国出来るか目処がつかない絶望のドン底生活に入る。強制労働に服する五カ年計画の酷使である。

雨後の増水の急流を下半身裸で臍上まで浸って川幅約十五メートル、必死の渡河断行にバランスを崩し、足をさらわれそうになり、危うく流されるところであった。二人は足をさらわれ、流れ行く後を追い探索

したにもかかわらず行方不明となり、遂に不帰の客となる。犠牲に対し哀悼の涙で合掌する。引率の警備兵や現場監督等同情の念全くなく、平然とした態度に憤懣の念に燃える。虫けら同然の扱ひである。

極寒の零下五〇度での作業強行をされ辛苦、不完全な服装で暖を得ず忍び難い。戸外で素手で金物に触るうものならくつついて離れない。殺風景な果てしない荒野の風に一入敵しい苦難の敵冬である。

ある日のこと、某と二人して収容所長宅の薪割り使役に行き斧の有無を問えば、お洒落なヒステリーのマダムはイエスと無愛想な口調で投与する始末。某は煙草の火を借りようと子供へ申し出たところ、ニエツトニエツトの連発で唾を吐きかけるやら足蹴りの態。母子しての奴隷扱ひの軽侮に讎敵しゆうてきの怨念、沸騰点に達する。痛恨の極みで報復の敵愾心に燃える。

食事情最悪にて腹満たせず、雑草等手当たり次第の食食、野生化する原始人に等しい。厨房付近の徘徊で残飯漁り。魚の頭、骨、野菜等、盗食の始末である。背に腹はかえられぬの喩えで統発する。

愛煙者は二重の苦悩である。警備兵が新聞紙で巻いた荒刻みの煙草の吸殻を投げ捨てるのを待つて一斉に競合拾吸の態、見るにつけ哀憐にて嘆かわしく、日に余る光景である。万物の霊長も零落したものであると痛感する。

正月、盆、節句等訪れる都度、望郷の念激高。あれこれ食べたいの連想で空しい連夜である。やる頼ない心境で走馬燈の如くふる里へ馳走する哀れな籠の鳥である。

収容所移動の際に、腰に吊るした食器代用の空き缶の音をさせながらの流転で、惨めなみすほらしい姿である。破れた汚い服装で痛ましい光景である。このままではいつ帰国できるかわからない。怪我したら優先的帰還の噂を正面に受けて、製材機で指切断する者数人あり。生き地獄から一刻も早く脱出したい一念の焦燥の行動である。

日本人の偉大なる貢献を忘れてはならない。面目一新する犠牲的賠償である。それなのに、精いっぱい働かせて何等補償なく、非人道極まる使い捨てである。

これでは凍土に没した犠牲者の霊も浮かばれない。日本人の器用に一驚を喫する功績の大偉業であるにもかかわらず、あまりにも無神経なのに啞然とする。

私の八カ所の収容所の流浪は、いろんな苦役に服する艱難辛苦の連続であった。食食は引揚船上まで波及する。司厨員の切る沢庵の頭と尻の切れっぱし、終わった途端に一齐に切屑めがけて躍りかかる態は、あたかも童心に等しい浅はかな醜行である。シベリアで如何に難儀したか推して知るべし。

戦友の平山氏から二人の人物が会いたいと申し出ている旨の伝達があり、船倉の一角へ急行。二人の若い船員が待機していた。笑顔で「お帰りなさい、長い間ご苦労さまでした」とねぎらわれる。首をかき「誰か」の尋問に「早崎浜の池崎厚男、大野利成」と名乗る。乗船名簿を見ての面会であった。意外な対面に喜びも一入であった。

大郁丸の乗組員で、両君は司厨員であった。再三眩しいほどの銀飯や色々の副食の差し入れあり、隣人へも分与して共に祖国の味覚に舌つつみを打つ。渴き

きった腹を満たす果報者であった。筆舌に尽くし難い思いやり深い供給で、至極満悦であった。下船の際は二人して二百円恵んでくれ、重々の厚恩、終生忘却出来ない印象深い感銘であった。感無量の恩情の熱涙にむせぶ救いの神であった。

明日は上陸という早朝、洗面に行った老軍曹は脳溢血で卒倒、逝去の悲報に接する。辛酸をなめ、折角祖国の土を踏まんとしているのに、妻子の喜顔も見ずして実に嘆かわしい次第である。

哀悼の意を表し黙禱を捧げる。

往時を偲ぶ

岐阜県 小川 太郎

満州第八九八部隊（関東軍衛生部幹部教育部）庶務課で動員並びに暗号担当兼少尉候補生のレントゲン教育助教として勤務していた私達に、昭和二十年八月十一日、兵站病院及び野戦病院各一を編成の動員下令あ